R・S・シャルマ編

インド社会——歴史的探究——（D・D・コーサンビー追悼論文集）

山崎元一

D・D・コーサンビー（一九〇七—一九六六）は、唯物史観に立つ斬新な歴史解釈によってインド古代研究に大きく貢献したインド人学者であり、その業績については、すでに桑原武夫氏（『思想』四五五号、一九六二年五月）、中村元氏（『インド古代史(下)』、春秋社、一九六六年）による紹介、山崎利男氏の訳書と解説（『インド古代史』、岩波書店、一九六六年）を通じてわが国に知られている。コーサンビー追悼論文集の出版計画は、氏の急逝の翌年に立てられたが、諸般の事情で編集に手間どり、七年後にやっと刊行のはこびとなった。寄稿者はインド内外の歴史学者、考古学者、哲学者、サンスクリット学者など二三人、長老から若手まで錚々たる顔ぶれで、コーサンビーの交友の広さと学問的影響の大きさがわかる。左に寄稿者と寄稿論文の題目を掲げておく。

V.V. Gokhale　Damodar Dharmanand Kosambi (with a list of his books and articles)

A.L. Basham　"Baba": A Personal Tribute

Daniel H.H. Ingalls　My Friendship with D.D. Kosambi

Dale Riepe　D.D. Kosambi: Father of Scientific Indian History

Raymond and Bridget Allchin　The Relationship of Neolithic and Later Settled Communities with those of Late Stone Age Hunters and Gatherers in Peninsular India

Vivekanand Jha　From Tribe to Untouchable: The Case of Niṣādas

Walter Ruben　Outline of the Structure of Ancient Indian Society

Romila Thapar　Social Mobility in Ancient India with Special Reference to Élite Groups

Suvira Jaiswal　Studies in the Social Structure of the Early Tamils

A.K. Warder　Feudalism and Mahāyāna Buddhism

R.S. Sharma　Material Milieu of Tantricism

R.N. Nandi　Origin and Nature of Śaivite Monasticism: The Case of Kālāmukhas

D.N. Jha　Temples as Landed Magnates in Early Medieval South India (c.A.D. 700～

	1300)
RADHAKRISHNA CHOUDHARY	Social Structure in Medieval Mithila (c.A.D. 1200~1600)
SURENDRA GOPAL	Merchants in Western India in the Sixteenth-Seventeenth Centuries
SATISH CHANDRA	Shivaji and the Maratha Landed Elements
IRFAN HABIB	The Social Distribution of Landed Property in Pre-British India (A Historical Survey)
K. SURESH SINGH	A Study in State-formation Among Tribal Communities
SABYASACHI BHATTACHARYA	Positivism in 19th Century Bengal: Diffusion of European Intellectual Influence in India
S.N. MUKHERJEE	The Social Implications of the Political Thought of Raja Rammohun Roy
BIPAN CHANDRA	The Indian Capitalist Class and British Imperialism
P.S. GUPTA	Notes on the Origin and Structuring of the Industrial Labour Force in India —1880 to 1920

以上の二二論稿のうち、最初の四稿はコーサンビーに捧げられた追悼文である。まずV・V・ゴーカレーが、コーサンビーの略歴と著作目録を紹介する。著作目録には著書が四篇、古典の校訂出版が五篇、論文が一二七篇掲げられており、それらの表題に目を通すとき、数学・歴史学・文献学・考古学・民族学など各方面に活躍したコーサンビーの多才ぶりに改めて驚かされる。続いてA・L・バシャムが、親しい友人であると同時に学問上の論争相手であったコーサンビーの思い出を語り、D・H・H・インゴールスが、取り交わした書簡を引用しつつコーサンビーとの学問的交際の思い出を記している。これら両追悼文に、故人の学問に対する情熱、学識の深さ、人生に対する禁欲的ともいえる厳しい姿勢が、鮮やかに浮き彫りされている。コーサンビーの歯に衣着せぬ相手批判は、学問上の敵を多くつくった。しかし、マルキストであるコーサンビーとは主義主張を異にするバシャムやインゴールスのような研究者を惹きつける人間的魅力も、かれは持ち合わせているのである。D・リープは第四稿で、コーサンビーがインド史研究において果たした役割は、J・ニーダムが中国史において、G・トムソンがギリシア史において果たした役割に等しいと評価し、コーサンビーの『バガヴァッド＝ギーター』研究を引用しつつ、かれこそ唯物史観の方法論を正しくインドに適用した最初のインド人学者の名誉を受けるべき

であると讃えている。

以上の四稿に続き、考古学から近代史に至る各時代の社会・経済を対象とした研究論文が一八篇、扱った時代の古いものから順々に並べられている。これらの論文のうちから、私の専攻領域に近い論文をいくつか選び、その内容を紹介してみたい。

コーサンビーは、ヒンドゥー社会とヒンドゥー文化の成立過程を、アーリヤの要素と土着の要素の接触・対立・融合の過程としてダイナミックに把えたが、本論文集にはコーサンビーのこうしたインド研究の成果を継承したものが多い。V・ジャーの「部族から不可触民へ――ニシャーダの場合――」もそうした論文の一つである。ニシャーダはアーリヤ人（アーリヤ化したインド人）がインド各地で遭遇した原住民の部族集団の一つであるが、ジャーはアーリヤ社会におけるニシャーダの位置を、おおよそ次のように考えている。――後期ヴェーダ時代にすでにニシャーダのアーリヤ社会への同化が一部で始まっていたが、かれらは不可触の存在とはみられていなかった。しかし、農耕社会に適合することに失敗し、狩猟・漁撈といった従来の生活手段を保持し続けたため、また不殺生思想の流行や、ニシャーダがヒンドゥー思想のタブーとする職業や食物に偏見をもたなかったこともあって、かれらの地位は低下した。そしてカースト化してヒンドゥー社会のハイアラーキーの中に組み込まれたものの、かれらは正統ヒンドゥー社会の枠外に位置づけられ、チャンダーラほど低くは見られなかったが、一般シュードラ以下とされ、アンタッチャブルと呼ばれる大集団の仲間とされていった――。不可触民の形成は、カースト制度を基礎とするインド社会の成立を解明するための一つの鍵であるが、史料の制約もあり、部族より不可触民への移行が、表題から期待されるほど明確には論証されていないのが残念である。

従来、インド社会の不変性やヴァルナ身分秩序の固定化が不当に強調されてきたが、インド社会は決して不動であったのではなく、独自の変化・発達を遂げてきた。R・ターパルの論稿「古代インドの社会的モビリティー――特にエリート集団について――」は、このような視点からエリート（高い地位をもった職能集団）を研究対象としてとりあげ、社会的地位に儀礼的地位と現実的地位の両面（例えば最高の儀礼的地位をもつバラモンの間にも貧富の差・職業の差は存在し、儀礼的地位の低い外来の征服者も現実的には最高の地位に立つ）があることに留意しつつ、古代社会のモビリティを考察したものである。現実的地位の上昇にともない儀礼的地位の上昇があった例として、バラモンによる非クシャトリヤ支配者に対するクシャトリヤ身分の承認、都市のギルドや職人集団およびカーヤスタ（書記カースト）の地位向上などが紹介され、

また仏教、ジャイナ教、バクティなどの新宗教運動を、現実的地位を高めた都市の住民の儀礼的地位上昇運動として把えている。ターパルはヴァルナ制度が理論上のモデルであったことを力説するのであるが、結論的には、ヴァルナ身分秩序の大枠のなかで、現実的地位の変化にともない社会集団の相互関係にある程度の変動がみられたことの指摘に終っているように思われる。

W・ルーベンには古代インドを論じた六巻本の大著《Die Gesellschaftliche Entwicklung im alten Indien》がある。本書に載せられた論稿「古代インドの社会構成の概要」はその梗概であり、ルーベンのインド史理解が簡潔に語られており興味深い。ルーベンは資本主義到来以前のインド社会を、「灌漑された田畑をもち、おおむね自給自足的・停滞的と言いうる村落共同体」に基礎を置き、ヴァルナ－アーシュラマ＝ダルマのイデオロギーによって支えられた社会であるとみ、この社会を、「アジア的生産様式のインド的変形」に基礎を置く社会」であると規定している。そして階級対立の視点から、こうしたインド社会におけるヴァルナ制や国家の成立、宗教の発達、科学や文学の発達を概観している。ルーベンのインド史観をかいつまんで紹介すれば次のようになろう。——インド史はアジア的生産様式のインド的変形に基礎を置く社会の歴史であるが、その社会は古代においては奴隷制の要素を強くもち（家内奴隷、およびヘロートと似たシュードラの存在）、中世においては封建制の要素を強くもっていた（領主層、および地位を向上させ村落共同体における生産の主たる担い手となったシュードラの存在）。その社会はイギリス植民地主義という形でインドに持ち込まれた資本主義によって受け継がれ、さらにその後に一九四七年の資本主義国インドの誕生を迎えた。アジア的生産様式のインドと、ギリシア・ローマ的生産様式のヨーロッパとでは、歴史発展に違いが見られるが、いずれにおいても共通の基礎的発展、すなわち部族社会→奴隷所有社会→封建社会→資本制社会（→社会主義社会）という発展がみられる——。ルーベンのこのインド史観は、世界史の発展の中にインド史を位置づける上に大きな問題を提起しているのであるが、その評価は大著の詳しい検討を通じてはじめて可能となろう。

かつてコーサンビーは、インド封建時代に異常な流行をみせた『バガヴァッド＝ギーター』を分析し、そこに説かれるバクティ（献身）思想が封建制社会のイデオロギーの基盤であった「忠誠」と完全に合致しているところに、その流行の原因を求めたが、本論文集に収められたA・K・ウォーダーとR・S・シャルマの論文は、コーサンビーのこの『ギーター』研究の延長上にあるものといえる。両者のうちウォーダーは「封建制と大乗仏教」のなかで、大乗仏教の発達が封建

制の成立とほぼ時期を同じくする点に注目し、成立途上にある封建秩序の理想が大乗思想のなかにいかに先取り的に表現されているか、大乗思想に既存の封建秩序がいかに反映しているか、という問題を考察している。ウォーダーは大乗仏教の根本を菩薩思想であると理解する。そして、利他行の実践に努める菩薩（その代表は観音菩薩）に「慈悲深い領主」の理想的な姿を見出し、また菩薩による救済をひたすら祈願する信徒に、封建領主の保護下に置かれ領主に受動的に服従する庶民の姿を見出している。要するに、西暦一世紀以後の初期大乗仏教は諸仏・諸菩薩思想を通じて封建的な支配・服従関係の理想を掲げ、三世紀になって発達する空観は現実世界およびその世界における不幸を幻影と説くことによって社会的不安を鎮め、六世紀以後の密教では有形・多彩な儀礼を通じて人々に最高の幸福に至る道を教えた。そしてこのようにして支配者・被支配者に示された理想が、発達途上にある封建秩序の内部における社会的な調和と安定のために大きく貢献したというのである。

シャルマは、続く論文「密教の物質的環境」のなかで、母神崇拝の主要寺院の所在、密教文献の成立地と成立年代、密教の残存分布などを検討し、密教がアーリヤ文化の中央部（マディヤデーシャ）にではなく外辺部の部族居住地域に発生したものであることに注目する。そして、バラモンが王侯からの土地施与を受けて部族居住地域に植民したことにより、アーリヤ社会周辺部の文化変容が生じ、バラモンが原住民部族の母神信仰を摂取することによって、新しい信仰形態である密教が生まれた（六世紀に確立）と推測する。またシュードラや女性はそれまでヴェーダの祭式の枠外に置かれていたが、アーリヤ社会の周辺部で成立した密教においては、農耕民として地位を高めたシュードラや、正統アーリヤ社会の女性よりも高い地位を享受していた部族居住地域の女性たち、ときには賤民までもが正式に参加を認められたことを指摘する。密教はこのように革新的な性格をもつものであったが、他方では既存の社会的・封建的ハイアラーキーも認めているのであり、ここからシャルマは、密教を、当時の封建社会に存在した社会的矛盾を緩和し、社会的和解をもたらすための一つの試みともみられると結論している。

以上に紹介したウォーダーとシャルマの論文は、いずれもインドに封建制が存在したことを前提としたうえでの議論である。両論文には、わが国の伝統的なインド仏教研究には見られなかったいくつかの新しい指摘がなされているが、私には十分理解できない部分もまた多い。例えばウォーダーは、諸仏土と封建領土とを対置し、極楽浄土から地主の土地経営を類推し、観音菩薩を理想的な領主の表現とみるのであるが、これらの仏教概念と「封建的」な所領、地主、領主とを

結びつけることの必然性が不明確であり、かなり恣意的な議論のように思われる。一方、シャルマの論文の表題にいう「物質的環境」とは、主として土地施与を受けたバラモンが部族居住地帯に植民したことを指しているらしい。密教はこうしたバラモンの植民に究極的な起源をもつというのである。密教がアーリヤ社会の周縁部に発生したというシャルマの見解には問題はなかろうが、バラモンへの土地施与がなかったならば密教は成立しえなかったのであろうか。

南インド史に関する論文は二篇収められている。S・ジャイスワルの「初期タミル族の社会構造の研究」は、十八世紀前半に始まるタミル社会研究の歴史を略述したものである。アーリヤ文化がタミル文化の発達に寄与したと主張するバラモン学者と、バラモン〜サンスクリットに代表されるアーリヤ文化の侵略により、水準高く独自性をもっていたタミル文化が腐敗させられたと主張する非バラモン＝タミル人学者の論争の過程が、要領よく紹介されている。D・N・ジャーの「中世初期南インドにおける大土地所有主としての寺院（西暦七〇〇〜一三〇〇年ごろ）」は、パッラヴァ朝とチョーラ朝における寺院への村落・土地寄進を検討したものである。そして、こうした寄進が、寺院で働き現物や土地の給付を受ける人数の増加、封建的土地保有の成長、農民に対する経済的束縛の強化、中央政権の弱体化などをひき起こし、これにより南インドの寺院に封建的性格が付与されたと結論している。R・S・シャルマの弟子であるジャーは、この論文で師シャルマのインド封建制論の手法を南インドに適用しているのであるが、同じ問題を追求してこられた辛島昇氏の御教示によると、いくつかの興味深い指摘がみられるものの、史料批判が十分でなく、かなりきめの粗い論文であるという。

以上、本書に収められた論文のうちの数篇を取り上げて紹介してみた。右の紹介からも明らかなように、論文のほとんどはインド史の発展をいかに把えるかという大雑把な議論であり、綿密な実証は今後の問題として残されている。しかし、いずれの論文にもコーサンビーの業績を継承しつつ新しいインド史解釈を試みようとする寄稿者の意欲が込められており、充実した論文集と言えるであろう。

なお、本書の刊行と相前後して、コーサンビー記念委員会（委員長はギリ大統領）編の追悼論文集がボンベイで刊行された。（Prof. D.D. Kosambi Commemoration Committee ed.: Science and Human Progress—Prof. D.D. Kosambi Commemoration Volume, Popular Prakashan, Bombay, 1974, xiii+384p.）シャルマ編の論文集に収められた諸論文がほとんどインド社会経済史関係のものに限られているのに対し、ボンベイ刊行のこの論文集は、㈠インド学を含む人文科学の論文、㈡数学を含む自然科学の論文、㈢追想・弔詞、

の三部門からなる。寄稿者は三六人。わが国からは深沢宏、中村元、原実、中田直道の四氏が第一部門に寄稿している。

(R.S. Sharma ed.: Indian Society—Historical Probings, in memory of D.D. Kosambi, People's Publishing House, New Delhi, 1974, vii+447p.)